

# 転生者の娘

tridentd5

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

地球出身の父親をもつモニカは官僚を目指して、魔法学院へと入学する。進級をかけた使い魔召喚の儀で人間を召喚したルイズを見た彼女は、生来の好奇心に従ってルイズたちと行動を共にするようになる。

4 3 2 1

--	--	--	--

27 24 20 1

目次



「我が名はモニカ・コイルトン。五つの力を司るペンタゴン。私の運命に従いし使い魔を召喚せよ」

青空の下、心地よい風が吹き抜ける草原に、上ずった声で紡がれた呪文が響く。

春の使い魔召喚の儀式。そこでモニカは、多くの同級生と顧問の教師の見守る中、進級をかけた魔法を唱えた。

数瞬遅れて、呪文を発した彼女の前に、白く眩くゲートが出現する。直視できないほどの強い光を放っているそれを、モニカは目を細めつつも視線をそらすことなくじつと見つめる。

やがて光が弱まり、ゲートが消失するとそこには一匹の白い蛇があった。体長はイメージルを超える程度。くねらせた体に模様はなく、太陽の光が淡く鱗に反射して陶器で出来た作り物のようにもみえた。

モニカと同様に、現れた蛇もまた、首をもたげチロチロと舌を出しながら彼女を赤い瞳で見つめていた。

(よかった。成功だわ)

滞りなく召喚が成功し、モニカはほうつと息を吐いた。

練習こそ幾度となくしてきたが、実際に唱えるのは初めての呪文。決して難易度の高い魔法ではないが、クラスメイトが注目する中、ぶっつけ本番で行うのはやはり緊張する。

張り詰めていた肩の力を抜き、改めて自らの使い魔となるものを観察する。

真つ白な蛇とは珍しいが、幻獣の類ではないようだ。ボーンチャイナの如く透き通るような白い鱗は、高価な磁気にも負けないつややかな輝きを放っている。猛でも怖れるでもない静かな赤い瞳で自分を見つめてくる白蛇に、モニカは気づかぬ間に見とれていた。

「ふむ、蛇か。召喚は成功のようだね。さあ、ミス・コイルトン。契約をしまえ」

召喚した使い魔と向き合ってぴくりともしない生徒にしびれを切らし、コルベールは契約を促した。

「は、はい。コルベール先生」

引率の教師の指示に従い、少し慌てた様子でモニカはコントラクト・サーヴァントの呪文を唱えた。慣れない手つきで蛇を持ち上げ、チロチロと真つ赤な舌が出入りする口許に口付けをする。数瞬遅れて白蛇の額に細い光が走り、ルーンが刻まれる。晴れて使い魔となった蛇は、ルーンが刻まれる痛みからか、わずかに身じろぎをしてみせるがそ

れ以上の反応は示さない。

やがて額にコインほどの小さなルーンが描かれ、懐いているのかモニカの左脚に巻き付いた。

我慢強くて、従順。それに周りに大勢の人間と幻獣がいるにもかかわらず怖気づく様子も見せないことから、度胸もある。自分には勿体ないほどの使い魔だ。モニカはそう思った。

「あなたに名をあげないと。このところ忙しくて考える暇もなかったけれど、ええと……白くてキラキラしているから、パールでいいかしら」

自分でも単純だと思ったが、気の利いた名前をつけることがモニカは苦手だった。

「契約は済んだかね。次の生徒が控えているから下がりなさい」

「わかりました」

あまりもたもたしては授業の進行に差し支える。そう考えてモニカはそそくさと立ち上がった。とはいえ、残りはあと一人しかないのだが。

手に持った杖を懐に仕舞いモニカは召喚の場から立ち去る。脚に巻き付いていたパールは歩き出そうと一歩踏み出したところで地面に下り、一歩下がった位置をつかず離れずついてくる。

入れ替わり、次に使い魔を召喚する女生徒から『十分に』離れて、若草の上に腰を下

ろす。コモンマジックとはいえ、異なる地点を結ぶサモン・サーヴァントは高度な魔法だ。土のドット、しかもゴーレムすら満足に作れないモニカにとっては、一度行えば全身を倦怠感が襲うくらいにはなる。

額にたまった汗を拭って、傍らでトグロを巻いているパールを撫でていると、突然激しい爆音と衝撃波が彼に叩きつけられた。それでも、焦ったりはしない。彼女の従順な使い魔は尻尾を震わせ、爆心地に向かつて威嚇しているが、モニカにとつて、この場に  
いる全員にとつてはこれまで毎日のように、何度も遭遇してきた事態だった。

「パール。大丈夫、落ち着いて」

警戒心を最大限引き上げている相棒を宥め、改めて爆発が起こった場所に視線をやる。

砂煙で視界は霞んでいるものの、そこには杖を掲げ慄然と佇む桃色の髪の少女、ルイズの姿があった。爆発に最も近い場所に居たにもかかわらず、不思議なことに怪我どころか艶やかなブロードヘアが乱れてさえいない。

華奢な身体に小さな顔と美しい髪。年齢の割に体の起伏は少ないが、名だたる芸術家が手がけたような彫刻のように整った顔立ちは、幼さを感じさせる体つきと相まって、たおやかな印象を見るものに抱かせる。同姓のモニカから見ても、本当に可愛らしい人だと思ふ。黙ってさえいれば、周りの男子連中が放つてはおかないのだろうが、現実



はキツイ人当たりや高飛車な態度、杖を振るたびに起こる爆発がルイズのチャームポイントを帳消しにしていた。

もつとも、前者に関しては彼女の産まれと境遇を思えば当然のこと。むしろ、卑屈にならず前へと進み続けようとする姿は、皮肉抜きにたいしたものだとモニカは思っている。

「ルイズ、サモン・サーヴァントで平民を呼び出して平民を呼び出してどうするの？」

何度かの爆発を経て静かになったと思ったら、今度は嘲笑するかのようなクラスメイ卜たちの笑い声が聞こえてきた。

「ちよ、ちよつと間違っただけよー」

級友たちの囁し立てる声にルイズは顔を真っ赤にして反論している。

何事だろうかと思つてルイズの方に目を遣ると、そこには見慣れない格好の少年がいた。中肉中背の身体に見たことのない服を着込んでいる。年の頃はモニカと同じくらいだろうが、彫りの浅い顔立ちが少年を実年齢よりも幼くみせていた。

どうやら、何処の生まれかも知れない人間を、ルイズはサモン・サーヴァントで呼び出したらしいとモニカは理解した。

状況が理解できていないのか、ゼロ、ゼロとバカにされている主人（になる予定のルイズ）をかばう様子も見せずに、ぼうつと座り込んでいる。

何を唱えても爆発しか起こせないルイズを随分と変わった娘だとモニカは思ったのだが、今回のコレは極めつけだった。

「まさか人間を召喚するなんて……」

思わずそう独り言を呟いてしまう。

使い魔は、その主人である人物のメイジとしての実力や才能、系統に概ね一致するといわれている。優秀なメイジならドラゴンや幻獣を、モニカのようなドットメイジなら鳥や犬猫などの小動物が現れる確率が高い。

では今回のコレはどうなのだろうか。

召喚された少年は見たところ貴族とは思えない。そうなるとメイジでない可能性が高いだろうが、使い魔の格としてみた場合、平民ほどの程度高位な存在だと考えれば良いのか。

犬猫よりは上だと思う。でもドラゴンと同等以上かと問われれば、違うと答えるだろう。別に、平民を蔑むつもりはない。モニカは大抵の人間よりもドラゴンの方がより高等な生物だと思っていた。

犬猫以上、ドラゴン未満ならルイズのメイジとしての才覚はラインかトライアングルということになる。魔法を一度も成功させたことのないルイズが、だ。

しかし、よくよく考えてみればルイズが引き起こす爆発の威力は並みのメイジじゃ生

み出せそうにない。考えるほどに不思議な事態だった。

やっぱり変わった娘だわ。

モニカは改めてそう思った。そして俄然、使い魔の少年とルイズに興味がわいてきた。

系統は、やはり火だろうか。でも、爆発が起こせて発火ができないというのは、なんとも解せない。それに、気の抜けた様子の少年と火のイメージは似つかわしくないようにも思える。

ああ気になる。けれど、ルイズとは親しく会話したことがない。いきなり話しかけて変な顔をされないだろうか。いや、でも、やっぱり……。

そんな益体もないことを考えていたら、地面についた手首にパールが巻きついてきた。

何事かと思つてパールを見ると、首を空中にまつすぐ伸ばして何かを指し示している。

その方向に顔を向ければ、クラスメイトたちがフライで学院の建物に戻っていくのが見えた。

「いけない、置いてかれちゃった」

全員が無事、召喚の儀を終えて授業はお開きのようだ。モニカも学院に戻らないとい

けないが、腰を上げるのも億劫なほど疲れきってしまった。

まあ、いつか。少し休んでから戻ろう。

そう考えて、あげかけた腰を再び芝生の上に下ろした。どうせこの後には授業の予定はないのだから、急ぐ必要もない。それに、学び舎までは結構な距離がある。フライならばすぐだがモニカには使えない。精神的な面でも、技術的な面でも。

ルイズはどうするのかと目を向ければ、ちょうど彼女の拳が召喚された少年の顔面にめり込んでいる場面であった。

「うわぁ………」

無意識のうちにモニカの口から声が漏れた。どうしてそうなったかは彼女には解らない。ルイズは短気なほうだけれども、すぐに手が出るような人物ではないので、なかよほど不興を買うようなことを少年が言ったのだらうか。

殴られた少年は気絶したのか、地面に伏せたままピクリともしない。

殴ったほうのルイズはといえば、少年を見下ろして肩で息をしていたが、暫くすると立ったまま固まってしまう。気絶した少年を学院まで連れて行かなければならないことに気付いて、途方にくれているのだ。

遠巻きに観察していたモニカはそれを悟り、助けを申し出るため未だ重い腰を上げてルイズの元に向かった。

「あのお、運ぶの、手伝いしましょうか？」

「……？ だれ、あんた」

モニカが背後から声をかけると、ルイズは怪訝な様子で振り返った。

「ええっ!? ひどいなあ……2年からずっと同じクラスだったじゃないですか」

名前どころか、顔も覚えられていないことに、モニカは肩を落とした。

「そうだったかしら。で、なんていうの?」

「既にクラス紹介のとき名乗ったのですが」モニカは不満そうに唇を尖らせた。「でも、覚えていないのなら仕方ないですね。モニカです、モニカ・コイルトン」

モニカの自己紹介を聞いて、ルイズは違和感を覚えた。

「コイルトン? 聞きなれない家名ね」

「うう……一応、ガリアとの国境の警備を仰せつかっています。でも、ヴァリエール領とは反対側ですし、新興の子爵家ゆえにルイズ様が知らないのも仕方ないですね」

そう言つて、モニカは自嘲気味に笑った。なんとなく気に入らない笑い方だと、ルイズは思った。貴族とはいかなる時も自分の家柄を誇りとしなければならぬ。それが彼女の信条なのだ。

「そう」と、承知してルイズは頷く。「なら、ミス・コイルトン? 『これ』をわたしの部屋まで運んでちょうだい」

台詞と同時に、ルイズは己の足元に白目をむいて横たわっていた少年を指差す。

「ああ」モニカはポンと手のひらを打った。「そうでした。でも、手伝うとは言いませんけど、一人で運ぶにはちよつと」

決して大柄ではないとはいええ、気絶した人間を動かすのは大変である。モニカは同年代の女性よりは筋力があるほうだと自負しているが、さすがにここから学院まで人ひとり運ぶには役者不足だった。

「なによ」今度はルイズが口を尖らせた。「レビテーションで運べばいいじゃない。私と違つて使えるんでしょ」

『私と違つて』をやけに強調してルイズは言った。

モニカは拗ねた様子の彼女を見て、内心面倒に思いつつも、穏便に済ませるために表情には出さない。

「確かに使えますけど……その、実はあまり得意でなくて」間違つても自慢話にはならないので、自然、ぼそぼそとした喋り方になった。「本を持ち上げることがせいぜいで、人間なんてとても無理です。それに、さっきの召喚で精神力はほとんど使い切つてしまいましたし……」

実際、今すぐにでもベッドにはいつて眠りたい気分だった。気を抜けば瞼が下りてくるので、立つことで眠気を防いでいる状態である。

しかし、それを聞いてルイズはますます納得がいかない。

「はあ？　じゃあ何で、手伝う、なんて言ったのよ？」

「それはだから、そのままの意味です。一緒に運びましょう」

そう言つてモニカは両手で少年の足を持ち上げた。

それを見てルイズは顔を引きつらせる。

「物理？」

「はい。わたしはどちらかというと、化学が得意なのですが」

にっこりと笑うモニカを見て、変なのに絡まれたな、とルイズは思った。

結局、学院まであと半分といったところで少年が目覚め、そこからは徒歩でルイズの部屋に向かうこととなった。

\*

「それほんと？」

「嘘ついてどうする」

学院の寮の一室、ルイズの部屋。そこで自らがここに至ることになった経緯を説明した少年、サイトに、ルイズは怪訝な表情でその真偽を問うた。

気絶から目覚めたサイトをとりあえず部屋へ案内したルイズだったが、そこで聞かされた話は俄かには信じがたいものだった。

「信じられないわ」

「俺だつて信じられん」

魔法使いがいなくて、月がひとつしかない別の世界。そんな場所からサイトはやってきたのだという。

「そんな世界がどこにあるの？」

「俺が元いたところはそうなんだよ！」

説明をしてもいつこうに信じようとしないルイズに、サイトはつい声を荒げてしまう。怒鳴ったことでもいよいよ空気が悪くなり始めたが、それを晴らすようにテーブルを挟んで向かい合った二人に、部屋の隅から声がかげられた。

「異世界、ですか。それはなんとも、珍しいところから来ましたねえ」

モニカである。緊張感のないセリフをはなつた彼女は目覚めたサイトをルイズが部屋まで連れて行く傍ら、面白い展開になりそうだと一緒に部屋までついて来たのだつた。

「なあに、ミス・コイルトン。あなた、こいつの言つてること信じるの？」

「全部が全部、本当なのかは分かりませんが、服装とか顔立ちから考えてもとりあえずはとても遠い場所から来たことは間違いなさそうです。仮にこのハルケギニアの外ならわたしにとっては異世界も同じですね」



「はあ。まったく、他人事だと思つて……」暢気といえば暢気なモニカの考えに、ルイズはため息を漏らした。「でも、そうね。一理ないこともないわ。じゃああんた、なにか証拠を見せなさいよ」

モニカに視線を向けていたルイズは、再びサイトと向かい合った。

「証拠？」

「そうよ。ハルケギニアじゃない別のところから来たつてのなら、なにか証拠を見せなさい。モノ次第で、信じてあげてもいいわ」

上から目線で言ってくるルイズに、なにか言つてやりたいサイトだったが話が進まなくなるのでぐつとこらえる。サイトは少し考えて、脇においてあった鞆の口を開けて中からあるものを取り出し、テーブルの上に置く。

二つ折りになつたそれを開き、平たいボタンを押すと真っ黒だつた部分に鮮やかな風景画が映し出された。

「わあ、綺麗ね。なんのマジックアイテム？どの系統で動いているの？」

「ノートパソコンだ。あと、魔法じゃない。科学だ」

「カガクつて何系統？四系統とは違うの？」

「だから魔法じゃないつて！これは、電気で動いてるの！」

相変わらず魔法で動いていると信じ込んでいるルイズに、サイトはいい加減に苛つい

てきていた。自然、説明する声も怒鳴るようになってしまいが、それに反応する人物があった。

「電気？それならこれは雷の力で動いているの？どういった仕組みなのか、詳しく聞かせていただけませんかしら？」

ずっと部屋の隅にある椅子に座っていたモニカは、すつと立ち上がるとサイトの両肩をつかんで詰め寄った。

「うわっ！な、なんだよいきなり」

対するサイトは突如として同年代の女の子に詰め寄られ盛大にキョドった。

興味深げに自分を見つめる、くるりと大きな金色の瞳に、顔が近いせいで感じられる息遣いとふわりとした『女の子の香り』。それと肩を存外強い力で掴むほっそりとした手の感触が、サイトのよくわからない部分を刺激した。

ルイズの、よく出来た人形のような美少女顔には負けるが、目の前のこの少女も地味ながらそれなりに整った容姿をしていることにサイトは気づいた。

なんだかイケない気分になりそうだったサイトは理性とも違う反射的な行動で、モニカをそつと突き放した。

「あ……失礼しました」

はしたないことをした。そう思ったモニカは若干頬を染めながら身を引いた。

「でも不思議です。この『のーとぼそこん』という物は魔法を使わずに風景を映し出しているのですよね？どういった仕組みなのでしょう。サイトさんは先ほど電気で動いているとおっしゃっていました。ということは、サイトさんはこの不可思議な現象を起こす機構と理論をご存知なのですか？もしそうであれば、是非とも教えていただきたいのです」

しかしながら彼女は出かかった言葉を飲み込むことはしない。身を引きながらもいつにないテンションでサイトに食って掛かる。

「い、いや……仕組みは……俺も知らねえけど……」

畳み掛けるように疑問を投げかけるモニカとは対照的に、サイトは若干引いてしまう。パソコンが電気で動くことは知っていても、どんな仕組みで動くかなんてことはごく普通の高校生であったサイトに解るはずもない。

「なんだ。やっぱり適当なこと言ってたんじゃないの。どこで拾ったマジックアイテムか知らないけど、仕組みもわからないんじゃないやあんなんかには勿体無いわね。質に入れるか捨ててきなさい」

しどろもどろになったサイトを見てルイズは冷たくそう言い放った。

「だから魔法じゃないんだって！あと、仕組みなんかわかんなくても使いこなせるからいいんだよ」

「へえ。じゃあ何ができるっていうの？」

「それは、インターネットとかみたり、音楽聴いたり、文章作ったり、いろいろさ」

「『いんたあねつと』？よくわからないけど、面白そうね。やってみなさい」

「……ネットに繋がってないから、今はできない」

「じゃあ音楽でもいいわ」

「それも、今はハードディスクに入っていない」

パソコンは修理から返ってきたばかりなのだ。サイトには人並みのリテラシーがあつたのでハードディスクの自身は修理に出す前に別のメディアに避難させていた。

「……なら文章作ってみなさいよ」

「……」

ルイズに言われたとおり、サイトは文書作成ソフトを立ち上げて文章を入力している。  
く。

「読めないわね」

画面に表示された日本語の文章をみて、ルイズはそう一言呟いた。

「役立たずじゃないの」

「……」

ルイズの辛辣な言葉にサイトはぐうの音も出ない。

ここに至ってサイトは、パソコンの万能とも言える高機能が、この世界では全く生かせないことに気づいた。バッテリーだって数時間も経てば切れてしまうだろう。

ルイズの言うとおりに質に入れてしまおうか。もしかしたら奇特な商人が珍しがって高値で買い取ってくれるかもしれない。突然この世界に召喚され、先立つもののないサイトはそんなことを考え始める。

「あ、それなら私が引き取りましょうか？」

黙りこんでしまったサイトにモニカはそう声をかけた。

「いいのか？」

意外な人物からの助け舟に、サイトは顔を上げた。

「はい。とても珍しい物のようですし、いろいろ調べてみたいのです。もちろんタダでは言いません。恥ずかしながら私もそれほど裕福ではないので、金貨を積むというのは無理ですが……銀貨50枚でどうでしょう？」

「それってどれくらいの価値なの？」

「そうですね。普通の平民が5日程度生活できるくらいの値段でしょうか」

「うーん」

パソコン1台が生活費一週間分にも満たない。正直なところ、ちよつと安いなとサイトは思った。でも、もしかしたら質屋でも買い取ってくれないかもしれない。そもそ

も、その質屋がどこにあるのかもサイトは知らないのだ。

「ご不満なら、生活の手助け、というのでも追加しましょう」

渋っている。そう感じたモニカは、一步譲歩してみせる。

「ん？どういうこと」

「サイトさんはきつと、いきなりこの世界へやってきて、右も左も分からないと思うのです。文化、風土、気候、常識、礼儀作法……私達にとつて当たり前のは、サイトさんのそれと大きく違うものだと見受けられます。もちろん、最低限の衣食住は主人であるルイズ様が用意してくださいます。それでも生活というのはそれだけで成り立つものではありません。ましてやサイトさんは平民。名だたる貴族ばかりのこの魔法学院では色々立つ角もあることでしょう。そして、ヴァリエール侯爵家三女の使い魔であるサイトさんはこの学院においては微妙な立場にあります。そんなあなたが騒動を起こせば、主人であるルイズ様の名誉や評判が傷つくこともあるかもしれません。そうならない為にも日常において様々なアドバイスを私が差し上げれば、お二方の利益にもなるはずです。そうは思いませんか、ルイズ様？」

「え？ええ、そうね。そのとおりかもしれないわ」

蚊帳の外気味だったルイズは、突然話をふられて動揺しながらもモニカの意見に頷いた。

「どうぞでしょう。この取引、受けてはいただけませんか？」

「お、おう」

問いかけるモニカの表情に、柔らかなくも有無を言わせない迫力を感じて、サイトはコクコクと頷くのだった。

## 2

モニカの父はとても厳しい人だった。

それは娘のモニカに対してでもあったし、それ以上に自分自身に対しての態度でもあった。

まだ夜の帳も明けていないうちにベッドからでて、鋤を担いで圃場へ向かっていくのが彼の日課だ。雨であろうが嵐であろうが、時には体調を崩した時でさえそれは変わらない。

父が身支度をする物音でモニカは毎朝起こされた。彼女がずっと幼い頃は身体を揺すられて起きたものだが、歳も5つを数えるようになると、少しでも寝床が恋しい様子を見せれば頬を叩かれた。

成長期のまつただ中、いくら寝ても寝足りない彼女にとってはとても辛かったが、ぐずればもつと酷く叱られることが分かっていたので我慢して農場へ向かう父に着いていった。母は、父と共に出かけしていく娘を心配そうに見つめながらも笑顔で送り出してくれた。



モニカ達の家は村の集落から離れた森の中にあった。もともと父と母はこの村の出身ではなく別の所から移り住んできたのだと彼女は聞いていた。

村の中心部でなくとも少し離れた場所に家を建てればいいのにとモニカは母に言ったが、ヨソモノには何処でも厳しいのだと言われた。そのため父はわざわざ森を切り開いて畑を少しずつ拡大していったそうだ。

収穫した作物を村の買付け所まで持つていくのはモニカの仕事だったので、彼女としてはそこから遠く離れた立地に不満があったが口には出さなかった。父は怠け者が嫌いなのだ。

農場で一日の手伝いを終えて家に戻っても、モニカが父から開放されることはない。日中使い果たしたエネルギーを補給するための夕食を摂った後は、疲れた身体を休めることも無く、蠟燭の頼りない灯りのもとで父の授業が始まる。

授業の内容は簡単な謎解きや基本的な識字に始まり、モニカの歳が10を数える頃には数学、天文、物理、化学、生物学等の幅広い分野に渡った。思い返せば、それらはこのハルキゲニアには“未だ”存在しないか未確立の学問であったが、当時のモニカは父と母が世界の全て。村のおじさん達と比べて多少もの知りだと思っていなかった。

これらに加え各種農法や気象についての知識を実践を伴いながら日中に叩き込まれる毎日。

普通であれば小児の域を脱していない子供には到底こなすことの出来ない内容であつたはずである。

しかしモニカは殊勉強においては類稀なる適性をみせた。それは強い好奇心のなせるわざであつたのかもしれない。

モニカが幼児の年齢を脱すると、父は農閑期に行われる狩猟にも彼女を連れ出すようになる。

獣道の見つけ方や罾の仕掛け方、そして自然への溶け込み方など、父は持てるノウハウの殆どを彼女に教えた。彼女はこの、狩りという行為が堪らなく好きだつた。木に登つて地形を読み、地面に伏せては大型の動物が放つ振動を感じ取り、叢に入つては獲物のさざめきに耳を澄ます。矮小な自分がまるで大地と一体化したようなこの感覚に、モニカは虜になつた。狩猟に没頭するうちに彼女は自然から五感以上の感覚を得るようになる。それは、今思えばこの時の経験が土を司るメイジとして大切な感覚を培つたということになるのだろう。全身から得られる感覚が幼い彼女の感性を育むと同時に、モニカは父の教える自然科学により傾倒するようになった。

幼い彼女の語彙では言い尽くせない自然の理を、父は理論立てて説明し、どんな疑問にも答えてくれた。父は魔法を使えなかつたが、モニカがメイジとして成長するために大切なことを授けた。母は魔法を使えたので、実技と感覚的な部分は母から、理論的な

部分は父が教師となった。

母と同様、土系統に才を發揮したモニカは魔法を習得してからは自ら地形を読み、獲物の活動の痕跡を辿るようになる。身体的な能力や武器の扱いは父に全く及ばないものの、狩りにおいては積極的なサポートを、農場においては土の手入れに精をだし、父も彼女の扱う魔法には信頼を置くようになった。厳しくも頼りがいのある父の役に立てることが、モニカは嬉しかった。

両親以外の人間に会う機会は、作物やジビエを卸しに集落へ向かうとき以外は滅多にない。世間から隔絶された森の中での、厳格な父と優しい母と過ごす三人だけのひっそりとした生活。不便や不満は多くともモニカはそれが嫌いではなかった。ずっとこのまま、三人の生活が続けばいい。そう彼女は願っていた。

## 3

黒く染まった夜空で輝きを放つ星々が衰退し、地平から黄色い光が滲む明け方、モニカは部屋の窓をコツコツと叩く音で目を覚ました。

前日に行った使い魔召喚のせいか、いつもより身体が重く感じられる。微妙に痛みを発する腰を起こして乾いた音が鳴る窓の方に目を向けると、つい前日自らのパートナーとなった白蛇、パールと名付けた使い魔が窓ガラスに向かって鼻先を打ち付けているのがみえた。

「パール？」

一見して意味の分からない行動をする相棒にモニカが名前を呼ぶと、パールは打ち付けていた顔を引っ込めて主人をじつと見つめた。

「……何かそこに居るの？」

微睡んでいた目を擦ってよく見れば、パールは頻りにシューシューと音を立てて窓の外に向かって威嚇していた。

パールはモニカの問いかけを肯定するかのごとく首肯し、再度窓に鼻先を打ち付け始める。

一体何がパールをここまで駆り立てるのか。寝ぼけた頭で少し考え、彼女は答えらしきことに思い至った。

それを思いついたと同時にモニカはベッドから体を起こして、窓によった。

「やっぱり」

窓の外には鳩が1羽、バサバサと音をたてながらパールと向かい合っていた。

「駄目よパール。この子はわたくしのお使いなの」

雄々しく翼を広げてパールに対抗するその姿を認めて、モニカはパートナーの首根っこを掴み上げて胸に抱える。

暫くは威嚇の音を鳴らしていたパールであったが、モニカが落ち着かせるために頭を撫でていると次第に大人しくなった。

使い魔が落ち着いたことを確認して一息ついてから、モニカは窓を開ける。

すると、やや間を置いて、外で羽ばたいていた鳩がサツシに飛び乗ってきた。

「ごめんなさい。パールにあなたのことを伝えていなかったわ」

モニカが謝罪すると、鳩は「フスツ」と息を吐いた。ご立腹のようだ。

「手紙を届けてくれたのね。ありがとう」

脚にくくりつけ筒から丸められた紙片を取り出す。

窓脇のツールに置いてあつた瓶の口に手を突っ込むと、モニカはミミズを一匹取り

出し鳩に与えた。瓶に土を入れ、餌用のミミズを飼っているのだ。

「じゃあ、帰りはこれを持って行って」

空の筒に昨夜したためた手紙を挿入し、放鳩する。

鳩が遙か平原の向こうへ行くのを見届けてから、モニカは届いた手紙を確認する。

「あら、薬の催促だわ。週末になったら出かけないと」

幸い、この週末は何の予定もない。王都までの馬車賃にはまだ余裕があるはず。

週末の予定に思いを馳せていると不意に寝間着の裾を引っ張られた。パールだ。

「あつ、まだあなたに朝ごはんをあげていなかったわね。どうぞ」

鳩に渡したのと同様、瓶からミミズを取り出しパールに与える。

「さて、わたしもそろそろ着替えようつと。」

まだ、夜が明けたばかり。朝食の時間までには随分と余裕があるが目がさえてしまった。

しっとりとした早朝の空気の中、学園の周囲を散歩でもすることにした。

「ついでに、あなたの餌場も見つけなきゃね。いつまでもミミズだけでは飽きてしまうでしょう？」

モニカの問いかけに、彼女の使い魔はこくと頭を垂れた。

散歩の後、軽く汗を拭いてからモニカが食堂へ赴くと、なにやらとある一画が騒がしいことに気がついた。

朝の食堂はいつもそれなりの賑わいを見せてはいるものの、どうにも常とは異なる様相を示しているようだった。注意深く観察してみると、食堂に集う面々の視線はモニカもよく知る、美しくひるがえる桃色ブロンドの御髪の持ち主とその従者に注がれているようだった。

モニカの立つ入り口付近からはその詳細な会話内容は把握できないが、なにかトラブルでもあったのだろうか。

「もし。失礼ですが、なにかあったのですか？」

観察しているだけでは始まらない。とりあえず近くの椅子に座る女生徒に尋ねる。

「ん？ああ、ゼロのルイズが平民を連れ込んだのよ。可笑しいわよね、使い魔らしいけれど、平民なんて。召喚できなくて、王都辺りの人買いから仕入れてきたって専らの噂よ。」

「まあ……。」

女生徒のどこか嘲るような答えにモニカはそれだけを絞り出すので精一杯だった。

齒に衣着せぬ物言いをすれば、ルイズの同学年での評判は決して良いものではない。魔法が使えない、授業の進行を妨げる（主に爆発による）、高飛車な態度。自尊心が高い思春期の貴族が集うこの学び舎では、それらの要素は周囲に溶け込んでいくうえで余りに致命的すぎる。王国一の彫刻職人が手掛けたと言われても信じるほどに周囲を圧倒する器量も、同性からしてみれば必ずしも長所とは成りえないのだ。

故に些細なことでも、彼女が言ったような陰口がどこからともなく湧いてきてしまう。

『ゼロ』の二つ名はその最たるものだろう。

いつものモニカであればこのような場面、なんとなく居心地の悪い思いをしながら事態が過ぎ去るのを待っていた。そもそも、クラスが同じであるというだけでほとんど交流すらなかったのだから。（事実、ルイズはモニカの顔と名前すら覚えてはいなかった。）

しかしながら今日はいつもととは少しばかり事情が異なる。昨日は曲がりなりにもルイズと関わりを持った。それに――、

（サイトさんとの契約もございませう……）

“のーとぽそこん”を譲り受ける対価として、幾ばくかの銀貨とサイトに対する生活



面でのサポートをする契約を結んだ。詳しい事情は分からないが、今の状況はその契約を果たす場面である気がした。

「ルイズ様、おはようございます。サイトさんもお元気そうで何よりです。」

何やら不穏な雰囲気気の二人に割って入り声を掛ける。突然話しかけて、無視でもされるかと内心不安だったが、ルイズは声を掛けてきたモニカに向き合う。

「あら、ミス……」

「コイルトンでございます、ルイズ様」

「そうコイルトン。そちらこそ、いい朝ね。」

「はい誠に。……とところで、なにかサイトさんとお話ししていたようですが。」

「ええ。この駄犬がね、せっかくご主人様であるわたしが慈悲深くも食堂にまで連れて餌を与えてあげようとしたのに、生意気にも文句ばかり。あなたからも何か言っちゃってくれないかしら?」

「はあ……、駄犬、でございますか……。」

艶やかな髪をかき上げながら、なかなかユニークな趣味でもあるかのようなセリフをのたまうルイズに、これは想像以上の展開だと思いきやモニカは二の句が継げなかった。

「だからっ、俺は犬なんかじゃねえ!ちゃんとサイトって名前があるんだよっ。それに、これっぽっちの食事じゃ足りるわけねえだろ!」

モニカとルイズのやり取りを聞いていたサイトがそういつてビシッと床を指さす。指先の示す方を辿れば、そこには床に直置きされた質素な皿と固そうなパンがあった。

「こんな人間様に対する扱いじゃねえって。モニカもそう思うよな!」  
「えっ……は、はい。そうであるような、ないような……。」

サイトから当然のごとくファーストネームを呼び捨てにされ、モニカは不覚にもたじろいってしまった。同意を求められても、これは名目上も実際上も主人であるルイズの手配だ。部外者の、それも昨日今日親交をもったばかりの自分に、表立ってこれを非難することは難しい。

どうしたものか、僅かな間逡巡するモニカだったが、やがておずおずとした口調で切り出す。

「あのう、差出がましいことかと思いますが、この場はとりあえずわたくしの配膳の一部をサイトさんに食べていただくというのは如何でしょうか? わたくし、実は朝はあまり食べられなくて。いつも残してしまうのでサイトさんに手伝っていただければとても助かるのですが」

モニカの申し出にルイズは顔をしかめる。モニカが彼女の使い魔に肩入れしているように思えてしまいどうにも気に食わない。それに、使い魔としての今後を鑑みた時、

この場で甘やかしては調子に乗ってしまう可能性もあった。

だが、ここで渋るのも優雅な貴族らしくないような気もする。朝の食堂はもうすでにかなり混みあつてきた。心なしか、さきほどから周囲の注目も集めてしまっている気がする。

「——そうね、ミス・コイルトンに免じて今日のところはそれで許してあげる。」

「マジか!? やったぜ。」

ルイズのその答えにサイトは歓喜の声をあげる。食卓に並ぶ絢爛な料理の一部を食べられることに、彼の中に巣くう庶民魂が震えた。

「はい。ありがとうございます、ルイズ様」

この場を収めてくれたことにモニカは安堵し、ほつと胸を撫で下ろした。

「それでは給仕の方にわたくしの配膳を一部、トレイに分けてもらおうよう頼んでおきます。——サイトさん、ご満足いただけるかはわかりませんが、どうぞ召し上がってください。」

「ああ、サンキューな」

にいつと笑い、サイトがサムズアップする。それを見てモニカは目を丸くして膠着してしまふ。

「ミス? どうしたの」

突如固まってしまった様子のモニカを不思議に思い、ルイズが声を掛けた。怪訝な表情のルイズに声を掛けられ、モニカはハッと我に返った。

「——い、いえ、なんでもありません。どういたしまして……です。」